

林家三代の学問・教育論

前 田 勉

はじめに

江戸時代の学校は、林羅山・鷲峰・鳳岡三代の林家塾を嚆矢とする。寛永七年（一六三〇）、林家初代羅山（天正一〇年～明暦三年、一五八三年～一六五七年）は、幕府から賜った上野忍岡に家塾を開き、その地に、寛永九年（一六三二）、尾張藩主徳川義直の援助を受けて、孔子を祀る先聖殿を建てた。次いで、寛文六年（一六六六）、第二代鷲峰（元和四年～延宝八年、一六一八年～一六八〇年）が、家塾の運営についての職掌と規約を定めて、五科十等の制という塾生の学習課程を編成し、さらに元禄四年（一六九二）、第三代の鳳岡（寛永二十一年～享保一七年、一六四四年～一七三二年）の時、將軍徳川綱吉の発意で、忍岡の家塾と先聖殿は神田湯島の昌平坂に移された。この林家三代が創始・整備した林家塾が、寛政九年（一七九七）に至って、幕府の直営学校、昌平坂学問所の母体となったことは

周知の通りである。

このうち林羅山・鷲峰親子二代の林家塾について、後に荻生徂徠が『学寮了簡書』のなかで、意外にも高く評価していたことはよく知られている。徂徠は、「林家ノ学問」は「元来道春・春斎時分ノ学問ノ好き仕方」であって、とくに第二代目の「春斎時分学寮ノ教方大抵全備仕候」とまで激賞していた。ところが、徂徠によれば、三代目の鳳岡が林家塾を継いで、湯島に移転した後の「三四十年来殊之外衰微」してしまい、山崎闇斎流の「講釈」朱子学が流行するようになったことで、よき教育方法は失われてしまったという。

一体、徂徠が評価した五科十等の制という「春斎時分学寮ノ教方」とは、いかなる教育方法だったのだろうか。なぜ「全備」とまで賞賛されるほどの「学寮ノ教方」が、鷲峰一代限りで、しかも、湯島に移転して規模を拡充・発展した三代目の鳳岡の

時代には衰微してしまつたのだろうか。さらに広げていえば、そうした「学寮ノ教方」を支えていた「林家ノ学問」とは、どのようなものであつたのだろうか。

本稿では、こうした諸問題を検討することによって、江戸時代最初の学校である林家塾の教育実態を明らかにするとともに、近世初期の時代状況のなかで学校が果たした思想的意義についても考えてみたい。そもそも、この時期、思想・宗教界に新たに登場してきた儒学者にとつて、学校は憧れの対象だった。たとえば、『信長記』（元和八年刊）や『太閤記』（寛永二年自序）の作者である小瀬甫庵は、「ねがはしき物」として学校と科挙制度をあげている。

○天下に学校、又国々にも有て、儒学行れ、国をだやかに民安きやうに。

夫、儒学は人道之大倫立べきやうを専学するのみ。人道立ばなどか国をだやかならざらん。国守は必異端之学を禁じ給へ。禁_二於異端之学_一則、至治之学在_二其中_一。

○及第之法、行る、やうに。

学の進事及第にしくはなし。学進則先王之法興らん。先王之法おこらば、如何至治あらざらん。³〔童蒙先習〕巻五、

慶長一七年跋、ねがはしき物

古代以来の分厚い蓄積のある「異端」の教えである仏教に對抗して、新たに儒学の普及を図ろうとした儒学者たちは、全国各地に学校を建て「人道」を教え、「及第之法」＝科挙制度を

施行することを願つたのである。林家初代の羅山も同様だった。羅山は、学校をめぐる徳川家康とのやりとりを次のように伝えている。

道春に謂ひて曰く、「方今、大明もまた道あるか。卿は以て如何となす」と。曰く、「これあり。春、目未だこれを見ずといへども、書においてこれを知る。それ、道は窃竊冥冥にあらずして、君臣・父子・男女・長幼・交友の間にあり。今や大明、閭巷より郡・県より州・府に至るまで、処処に学校あらざることなし。皆、人倫を教ふる所以にして、人心を正し風俗を善くするを以て要となす。然れば則ち果して道あるか」と。ここにおいて幕下、色を変じて、他を言ふ。春もまた言はず。⁴〔羅山文集〕巻三一、問対二

羅山は「大明」の学校の盛況さを羨望していた。ところが、現実には、家康が「色を変じて」話題をそらせたように、国家制度としての学校建設は難しかった。そのような時代状況のなかで、羅山は私的な家塾をいち早く建て、羅山を受け継いだ鷲峰・鳳岡はそれを発展させ、いずれは「大明」のように「閭巷より郡・県より州・府に至るまで」の公的な学校が全国に建設されることを夢見ていたのである。本稿では、この林家三代のうち、とくに徂徠が「大抵全備仕候」とまで評価した林家二代目の鷲峰の「学寮ノ教方」を明らかにすることによって、学校がいまだ制度化されず、憧れの対象だった近世前期の時代状況のなかで、学校が持つ歴史的可能性を検討してみたい。

一、博聞強記の学問

林家の学問といえば、徂徠が「ハ、広ク学ハセ候道春ヨリ伝来ノ家法ニテ御座候」(『学寮了簡書』)と説いていたように、博学を特色とすることは知られている。羅山は何より、博聞強記の学者として有名だった。鷺峰もまた父親羅山にならない、博学を目指した。『鷺峰文集』には、博学の勧めが頻出する。

纔かに学びて之れを得れば、則ち以て自ら足れりと為るは、遂に之れを為すこと能はず。陶弘景、万巻の中、一事を知らざるを以て深耻と為す。学者、豈に之れを思はざらんや。(『鷺峰文集』巻一八、勸学説、寛永一三年春)

書を読むは芸能の尤なり。事物の理、備はざる無し。今古の跡、載せざる無し。孤陋寡聞なれば、則ち業を成すこと能はず。故に經史子集、涉獵せざるべからず。本朝に生まれて本朝の事を知らざるべからず。故に、倭書も亦、読むべし。(『鷺峰文集』巻六一、答童難、万治三年、下六〇) 六一頁)

こうした「經史子集」ばかりか、「倭書」までの「万巻の中、一事を知らざるを以て深耻」とする博聞強記は、同時代の真率な儒学者からみれば、たんなる物知りに過ぎず、非難すべきものであった。同時代、中江藤樹や山崎闇斎・室鳩巢の批判は、まさにこの点を衝いていた。彼らはそれを「己の爲めにする」道徳的修養の欠如とみなしたのである。しかし、朱子が『大学

章句』序において「俗儒の記誦詞章の習は、其の功、小学に倍すれども用なし」と説いていたように、そのような非難は林家の人々とて、百も承知だった。そうだからこそ、「高く性理を談」じる朱子学者(おそらくは山崎闇斎を念頭にいれている)が、「博識を以て妨げ有」る「俗儒」だと非難していることにはたいして、鷺峰は次のように反論していたのである。

近年、聞くならく、高く性理を談じ、以て程朱再び出づと為して、文字を擲ちて、博識を以て妨げ有りと称して、余が輩を指して俗儒と為す者も亦、之れ有りと。彼は彼を為し、我は我を為す。道、同じからざれば、則ち相ひ為に謀らず。余は唯だ家業を守るのみ。若し試みに四書五經の註に引く所の典故、其の出処を知らずして、其の文義の通ずるや否や、又宋儒の註解、文法を知らずして読み得るや否やを問へば、則ち未だ知らず、彼の徒、如何にか之れに對へん。(『鷺峰文集』巻七八、西風淚露中、下二三三頁)

鷺峰は、「高く性理を談」ずる者が四書五經の註の典拠も知らないで、朱子の再来などと大言している、と批判して、「彼は彼を為し、我は我を為す」と、そうした「俗儒」批判を突っぱねたのである。それにしても、こうした「俗儒」批判が当然予想できたにもかかわらず、林家の人々があえて博聞強記を自覚的な目標としていたとすれば、少しく考えてみる余地がある。そもそも、江戸初期の儒者という社会的存在が「物知り」としての役目を期待されていたことはまず押さえておかねばなら

ない。当該期の逸事を集めた『明良洪範』には、この点で興味ある鷺峰の話伝えてある。將軍御台所に献上するために用意した、土佐光信の「源氏の大屏風」の絵について、大老酒井忠勝から質問を受け、鷺峰が「歌書の事不案内」だと答えたことにたいして、忠勝は次のように戒めたという。

儒臣に召仕はるゝ人は、必漢書のみには限る可らず。日本の儒官は日本の事第一知るべき事也。殊に源氏絵の屏風は世上に多き物也。我は苦しからず。他家諸侯の方にて天下の儒官に任ずる人が近く取扱ふ物を知ずとは申され間敷ぞ。儒は物知りと訳せずや。(『明良洪範』卷一)

この一件があつて、「林家にて和学に長ぜられしは春齋也」と評されるまでになった、と『明良洪範』は付け加えている。事の真偽はともかくも、ここで注目すべきは、「物知り」が「日本の儒官」に求められる役目だったという点である。林家人々は幕府に仕えている限り、そう簡単に、大洲藩を致仕して故郷近江に隠棲した中江藤樹のように「物知り」は「朱子の所謂能く言ふ鸚鵡」(『林上剃髪受位弁』)だ、などと頭から否定できなかつたのである。鷺峰はむしろ、そうした「物知り」≡博学を幕府に仕える林家の「家業」だと積極的に受けとめていた。たとえば、鷺峰は甥の林晋軒(林読耕斎の子、勝澄、字は草卿)にたいして、次のように警戒している。

礼に曰く、男子は二十にして冠して字すと。我が姪憲、今茲に其の齡、既に焉に及ぶ。字を我に請ふ。乃ち之に字し

て、草卿と曰ふ。諸れを文武を憲章するに取るなり。説を作りて告げて曰く、凡そ人各々業有り。業有れば、必ず法有り。法を守れば、必ず明かなり。之れに法り之れを明らかにするは、憲章の義なり。博聞強記は汝の家法なり。(中略)四書六経は文武の道を載す。歴史子集数千万卷は、之れに本づかざること無し。其の義を講じ、其の事を知り、其の言を考へ、其の詞を弄するは、我が家の業なり。汝、家法を守りて其の業を明らかにすれば、則ち庶幾くは其の名字に負かざらんことを。(『鷺峰文集』卷二四、草卿説、寛文一三年、上二六〇頁)

鷺峰には、「博聞強記は汝の家法」とあるように、「博覽強記」を林家としての「家業」とする使命感があつたのである。鷺峰は息子梅洞にも、「家業の盛衰、汝に在るが故なり」(『鷺峰文集』卷七七、西風淚露上、下二〇五頁)と諭し、「家業」を強調していた。われわれはこの「家業」という言葉に込めていた鷺峰の思いを想像しなくてはならない。

本来、修己と治人を目標とする儒学者が、単なる「物知り」学者としてしか遇されなかつたのは、当該期の幕府、広くは世間の人々の儒学≡学問にたいする認識・評価が低かつたからである。鷺峰は誰よりも、当時の人々の学問への無関心さを痛感していた。鷺峰は、内々では「幸に太平の世に生れ、起居、穏やかと雖も、不文の国に生れ、盲聾の中に混ず。出づれば、則ち見る所、聞く所は皆、利達の事を求むるのみ。諺に曰く、

九十九の鼻缺くる猿、一の全体猿を咲ふの類、亦之れ無きに非ず」(『国史館日録』寛文七年九月六日条)とまで、無学な世間を酷評していたのである。鶯峰は、そうした「不文の国」のなかでの疎外感に堪えながら、「物知り」としての役目は、たしかに「一能」に過ぎないかもしれないが、「無用の用」があるのだと自ら慰めていた。

今の世、武徳を以て太平を致す。然れども一能を棄てずして百事闕けず。一弧は軽き物なり。然れども中流に舟を失ふに当りては、則ち千金にも換へず。独木の微も、蔑視すべしと雖も、然れども岸谷の隔つる、之れ無きときは、則ち超ふること能はず。故に国家を治むるの術に、無用の用有り。若し夫れ常に用ひざるの物を以て取るに足らずと為すときは、則ち宝刀靈刀の蔵も亦、日用の器に非ず。然れども之れを伝へて以て珍宝と為るは、唯だ是れ不虞の変に備ふるに過ぎず。然らば則ち一能の平日に用ひられざるも、豈に不時の用に有らざらんや。是れ世に棄てられざる所以なり。(『鶯峰文集』巻五〇、一能子伝、寛文七年、上五三二—五三三頁)

「武徳を以て太平を致」した幕府のなかで、「無用の用」として博学は有用な役目を担っているのだという。鶯峰は、幕府内で「無用の用」を担うことが林家の「家業」だと自己規定することによって、「記誦詞章」非難を招かざるをえない、「博覧強記」の学問を正当化していたのである。

しかし、鶯峰の場合、博聞強記が「家業」だとはいえ、膨大な書物を読み、古今内外の事象を覚えて、「不虞の変に備」える「無用の用」の行為は、修己と治人の目標を見失い、自己目的化する危険をはらんでいた。そのなかで、寛文四年(一六六四)、幕府から命令された『本朝通鑑』編集は、博聞強記に「無用の用」ではなく、積極的な活用場を与える大事業であったといえるだろう。鶯峰自身にとってみれば、『本朝通鑑』編修を果すことが自己の「職分」だった。「修史は余の職分なり」(『国史館日録』寛文八年二月二日条)。士農工商の四民それぞれに「職分」があるように、鶯峰にとって、修史作業は林家の「家業」にともなう「職分」として強く意識されたのである。

ところで、誰もが「博聞強記」の学者になれるものではない。一廉の学者になるためには、ひたすら学問に勤めなくてはならない。そもそも、羅山によれば、学問せずに官爵にしている者は、牛や馬が人の衣裳を着た内実のない「酒囊飯袋」に過ぎなかった。

学ばずして官爵に有るは、馬牛の衿裾、猿狙の環珮なり。智無くして温飽なるは、酒囊飯袋、行屍走肉なり。吁。(『羅山文集』巻六九、随筆五、寛永年中)

ましてや「博聞強記」を家業とする林家では一層、そうならないために、勤勉に学問すること、「勤学」が唱えられた。羅山は次のように弟子を励ましている。

男子、平生の志を遂げんと欲せば、六経勤めて牕前に向かつて読めと。是れ真宗皇帝の勸学の文なり。若し書を読みて道を知らざれば、則ち一肉塊、蠢蠢然たるのみ。之れを行屍走肉と謂ひ、之れを馬牛矜裾と謂ひ、之れを猿狙環珮と謂ふ、亦た吁れはしからずや。飽くまで食ひ、終日、心を用ふる所無し。之れを酒囊飯袋と謂ふ。言と行と相際く。之れを能言の鸚鵡猩猩と謂ふ。〔羅山文集〕卷五九、昇沢氏子、寛永三年

「平生の志を遂げんと欲せば、六経勤めて牕前に向かつて読め」とは、「真宗皇帝勸学文」の最後の一聯の句である（『古文真宝前集』卷一）。もともと、そこには学問をすれば、「千鐘の粟」や「黄金の屋」「顔玉の如き」女が手に入ると説かれていた。しかし、羅山は肝腎かなめの経済的・社会的な榮譽にかかわる言葉を削ったうえで、「六経勤めて牕前に向かつて読め」と促していた。科擧のない近世日本では、科擧を前提としていた「勸学文」の文言はそのまま引照できなかつたのである。物質的な利益の無い分、学問への動機づけという面では弱くなったといえるが、逆にいえば、林家の人々には、それだけ学問それ自体への精神的な希求が強かつたともいえるだろう。ともかくも、鷺峰もまた羅山同様に、「勸学文」を引照していた。

人は学ばざるべからず。学べば、則ち禄其の中に在り。学ばざれば、則ち物の比倫するに堪ふる無し。故に古人勸学に曰く、男子、平生の志を遂げんと欲せば、六経勤めて窓

前に向かつて読めと。若し斯の言を信ぜば、其れ必ず效有らん。〔鷺峰文集〕卷一一五、漫筆、年不詳、下五六〇頁）

「学べば、則ち禄其の中に在り」は『論語』衛靈公篇の語。また、「学ばざれば、則ち物の比倫に堪ふる無し」は、「朕無学の人を觀るに、物の比倫するに堪ふる無し」（『古文真宝前集』卷一、仁宗皇帝勸学文）を踏まえている。鷺峰の場合、学べば、後から物質的な「禄」もついてくると説いている点で、羅山と異なっている。しかし、それも確實なものではなかつた（この点は後に述べる）。この背景には、林家の社会的地位の上昇があつたにしても、学問がストレートに現実的な榮譽に直結する、制度としての科擧がなかつたことに変わりはなかつた。そのなかで、鷺峰は羅山同様に、執拗に弟子たちに怠惰を戒めたのである。

古今の学者、或は之れを成し、或は之れを成すこと能はず。古人は之れを成すこと多し。今人は之れを成すこと少なし。鱗角牛毛の譬、良以え有るなり。其の成すと成さざるとは、勤むと勤めざるとに在るのみ。敢て古今の遠近に係らず。驕奢放逸なる者は、貴しと雖も、之れを成すこと能はず。力学篤行なる者は、賤しと雖も、必ず之れを成す。敢て貧富の同じからざるに係らず。〔鷺峰文集〕卷一八、勸学説、寛永一三年春、上二二一頁）

其の能に堪えずして、禄を食むを、之れを尸禄と謂ふ。汝、

頃間、学料の恵みを受く。幸なりと謂ふべし。既に其の禄を受けば、則ち勤めざるべからず。尸禄の譏りを受くること無し。若し勤めて進まざれば、則ち生質の分か。然れども人之れを一たびすれば、己之れを十たびし、人之れを百たびすれば、己之れを千たびすれば、則ち豈に其の効有らざらんや。詩に曰く、素餐せずと。汝、其れ之れを戒めよ。伝に曰く、学べば、則ち禄其の中に在ると。汝其れ茲を念へ。(『鵞峰文集』卷三七、与島周、寛文九年、上三八六頁) 鵞峰が勤勉を促す際、とくに時間を意識せよ、と強調した。鵞峰によれば、人間には限られた時間しかないという。鵞峰は朱子の「勸学文」を参照しながら、息子梅洞の別号「勉亭」に關連して次のように説いている。

朱文公曰く、謂ふ勿れ、今日学ばずとも、来日有りと、今年学ばずとも、来年有りと(『古文真宝前集』卷一、朱文公勸学文)。想ふに夫れ勸学の格言、此れに過ぎたるは無し。其の学を承くる者は誰ぞや。勉を以て齋を名づくるの人春信なり。(『鵞峰文集』卷三、勉亭記、万治三年、上七八頁)

鵞峰は「謂ふ勿れ、今日学ばずとも、来日有りと、今年学ばずとも、来年有りと」という朱子の「勸学文」を引照して、一生の短い時間のなかで、勤勉に努力して「進歩」することを求めるのである。

千里は遠し。歩を進むれば、則ち日を経て至る。咫尺の近

き、歩を進めざれば、則ち自若なり。汝、北州に産し、京洛難波に経歴すれば、則ち既に歩を進め、今、此に来たり。文字を窺ふに、勤めば、則ち進むべく、勤めざれば、則ち自若のみ。齡壯んにして脚健なり。何ぞ歩を学路に進めざらんや。(『鵞峰文集』卷二〇、進歩説、寛文九年、上二二一頁)

時間意識という点でいえば、鵞峰が『本朝通鑑』編修を進めるにあたって、上野忍岡の林家塾を増改築した編集所である国史館において、朝から夕方までの日課と休日を選定していたことを注目すべきである。寛文四年(一六六四)、編集を始めるにあたって、鵞峰は国史館に以下のような掲示をした。

一に曰く、出席は辰。後、申刻に至りて退去すべし。

一に曰く、毎月五箇日、休息すべし。

一に曰く、官本は勿論、他方より呈する所の旧記、損すべからず。私に写すべからず。

一に曰く、万座、意に協はざる事有りと雖も、此の席に於いて口論すべからず。

一に曰く、諸事、弘文院の指揮を守るべし

寛文四年十一月朔日奉行(日録)寛文四年一〇月二六日条

辰刻(午前八時)から申刻(午後四時)までを、編集の仕事時間と定めて、月五回の「休日」を取るようになっていた。国史館では、官本を「私」に書写してはならないと、公私の区別をするばかりか、「公」「私」の時間的な分離を定めていた。

林叟、史館の休日の方つて、朝より午に至るまで、国史を対校し、晩に書を読み、朱を点す。終日、休まず。自ら嘆じて曰く、勤めに就くは、則ち国史館の提挙なり。休日には、則ち晩林の夕陽叟なり。公なるべきときは、則ち公、私なるべきときは、則ち私なり。公事、緩かにすべからざるなり。私事、意に任すべきか。意に任せば、則ち較^{くら}懈^{ゆる}る。懈れば、則ち遂げず。遂げざれば、則ち廢す。然るときは、則ち私事と雖も、日を限り時を刻みて、之れを成せば、則ち自ずから其の効を見ん。余、常に私事を以て公事に准じて、怠慢せず。故に勤めに就くこと日多く、休日少なしと雖も、私の為す所も亦、日を積みて成る。家に藏書万巻有り。未だ其の十が一を見ず。嗚呼、老ひたり。衰えたり。日も亦、足らず。力も亦、足らざるなり。（『鵞峰文集』卷一一五、休日漫筆、寛文八年九月、下五五六―五五七頁）

「公なるべきときは、則ち公、私なるべきときは、則ち私なり」という公私の区別はたんなる意識の次元の問題ではなく、生活時間の分離を意味していたのである。朝から夕方までの間は、編集の「公事」の時間である。その後、夕刻、申刻から夜までが、それぞれの意思に任された「私事」の時間である。国史館では、正確に時刻を測るために、「自鳴鐘を座隅に置き、以て時刻を知る」（『日録』寛文四年十一月一日条）とあるように、時計を置いていた。

鵞峰が書いた『国史館日録』には、公的な仕事は、「館事」

と記されている。『本朝通鑑』編集初日、寛文四年十一月朔日には、「辰刻、国史館に到る。高庸、先に至る。而して友元・伯元・春貞以下、筆吏・備書者、皆至る。（中略）申刻に及びて、皆退散す」とある。翌日には、「館中の事、昨日の如し」（『日録』寛文四年十一月二日条）と記され、以後、「館事如例」の記述が続く、定時に始業・終業が行われていたことが分かる。

「館事」の具体的な内容といえは、『本朝通鑑』の叙述はいうまでもなく、蒐集された書籍の筆写と校正もあつた（ただし史料の蒐集は思うようにはいかなかった）。後に述べる『本朝通鑑』の叙述を担当する四人の員長と補助役以外の者たちは、単調な筆写と校正に従事した。そこでは、一字をもゆるがせにしない厳密さ・正確さと耐久力が求められたのである。

これにたいして、学問は、「館事」の公務の後の「意に任」された余暇にすべきものであつた。学問は編纂作業の公務の傍ら、その余暇の「私事」として位置づけられていた。

侍生の史館に在る者、倭書を校するは其の当務なり。其の余力には、則ち各々其の好む所に随ひ、或は詩を作り文を属することを学び、或は史漢文選を読む。其の余、多々品々なり。頃間、小出龍泉、易学啓蒙を窺ひ、粗^こ、疑義を質問す。（『鵞峰文集』卷三六、示小出龍泉、寛文七年冬、上三八〇頁）

「各々其の好む所に随」い、「余力」として、国史館の「侍生」は、詩文を作ったり、史書を読んだりして、自分の得意とする

分野を学ぶことが許された。そこは、短い限られた一生のなかで、単調で根気強い作業が求められる公的な「館事」とは違い、自分の「好む所」に任せられた自由な時間だった。興味深いことは、林家塾の教育は、公務としての『本朝通鑑』編集の過程で、この「私事」の領域で整備されてゆくことになる点である。林家塾では学問・教育は、あくまで「私事」の時間になされたのである。

二、講釈と門生講会

ところで、上野忍岡の林家塾では、どのような教育が行われていたのだろうか。その一つの方法は講釈である。「春斎時分学寮ノ教方大抵全備仕候」と称賛していた徂徠は、鷲峰の講釈にたいして、「随分堅キ講釈ニテ御座候」(『学寮了簡書』)と評価している。

其講釈ノ致方モ經書計ニ限ラス、詩文ノ書ニテモ文面ノ一通リニテスミ難キ故事出処ノ考入候書物ヲ学者ノ為ニ講候事ニテ、随分堅キ講釈ニテ御座候。(同右)

鷲峰は先に見たように、四書五經の註の典拠も知らない性理学者(山崎闇齋)を批判していたが、徂徠はそれに同意して、「書物ヲ学者ノ為ニ講」ずる鷲峰の講釈を評価していた。

春斎時分ハ弟子共何レモ講釈下手ニ而、嘉右衛門如ニ無御座候故、世上ニテ笑候ニ付、人見友元異見申候得者、春斎事之外立服(腹)イタシ、学問狭事ニテハ儒者ノ御用向足

リ不申候故、道春ヨリノ家法ニテ、此方ノ家ハ嘉右衛門扨トハ違ヒ、ハ、広ク学問イタス事ニテ、只今講釈ヲ第一ニ為致候ハ、家之学問衰微可致候。異朝ニテモ道学先生ヲ立候者、不学ノ儒者ノ隠家ト云ル事ナリト申候而、曾而承引不仕候。(同右)

「講釈下手」の鷲峰の講釈として有名なものは、易経・詩経・春秋・書経・礼記の五経講釈である。鷲峰は、寛永一八年(一六四一)正月、二四歳に『詩経集伝』の講釈を始めてから、寛文三年(一六六三)十一月、四六歳の時の『周易本義』の講釈に至るまでの間に、五経すべての講釈を完了した(『鷲峰林先生自叙譜略』)。この長期間の五経の連続講釈は、もともと羅山の命令で始めたものであった。羅山は彼自らが訓点を付けた『五経大全』を鷲峰に与えて、「経筵」を開くことを命じたのである。

噫、寛永十七年庚辰の冬、先考(羅山)、点する所の五経大全を以て余に授けて曰く、是れ我が家蔵万卷堆の最なり。今以て汝に附す。以て経筵を開くべし。人の為めにすれば、則ち其の蠱、幹し難し。己れの為にすれば、則ち其の事成る。其の聴く者に於いては、則ち来る者は拒まず、去る者は留めず。多しと雖も、嫌ふこと勿れ。寡しと雖も、厭ふ勿れ。唯だ毎月、日を定めて怠ること勿れ。怠ること勿れ。汝、我が言を守らば、則ち古来の一稀にして、家業の大事なり。其の文義に通ずることを得ば、則ち道も亦、

聊か庶幾んか。勉めよや。勉めよや。余、時に二十三歳、謹みて命を受けて、明年辛巳正月より、詩を講じ、朱伝を併せて、頤を解く。〔鷺峰文集〕卷六六、告講經始末文、寛文三年一月二十九日、下一〇一頁

羅山は鷺峰に毎月、日にちを定めて、継続することを求めた。聴衆は「来る者は拒まず、去る者は留めず」、お構いなしで、「己れの為にする」ことを目指したからである。鷺峰は「家業の大事」だという強い使命感から、これをやり遂げた。この五経講釈終了後、その功によつて鷺峰は、寛文三年十二月、幕府から弘文学院学士の称号を賜ることになる。『私考』と題された鷺峰の著作群はその成果である。

林家塾では、鷺峰の五経講釈のように、師から弟子への講釈がなされていた。鷺峰の講釈は毎月五回、三日・十日・十六日・二十一日・二十六日を定日として行われた。ただ、林家塾では『本朝通鑑』編集以前に、師から弟子への、上下関係の下での一方的な講釈ばかりか、弟子たちが相互に講釈し合うことを奨励していたことは注目すべきである。鷺峰は「諸生」に次のように論じていた。

夫れ同声相應じ、同氣相求む（『易』乾、文言伝）。故に龍の雲に於ける、虎の風に於ける、魚の水に於ける。鳥の林に於ける、物皆然り。況や人に於いてをや。同門の友に於いてをや。旃れに加えて、朋友、兄弟の義有れば、則ち同声同氣、豈に他に求めんや。頃間、諸生屢々、余が輩の講

席に陪し、肩を拍ち袂を挹みて、切々偲々なり。且つ今、其の請ふ所に依つて、各々をして試みに大学章句を誦せしめて、節を分ち圖を探り、其の次を守り、更に迭に之れを誦せしめ、更に迭に之れを聴く。人の師為るの患有るに似ると雖も、亦た是れ友を会し仁を輔るの一端か。（『鷺峰文集』卷四三、論諸生、承応二年、上四四四〜四四五頁）

鷺峰は「朋友」間の「講磨」を奨励して、「節を分ち圖を探り、其の次を守り、更に迭に之れを誦せしめ、更に迭に之れを聴く」とあるように、塾生相互で講者と聴者を交換し合いながら講釈し合う「門生講会」を組織したのである。しかも、はっきりと規則を定めていた。それが「門生講会式」である。そこには、次のような簡条があつた。

一 講中、疑義有らば、縦ひ末座為りと雖も、講畢りて後に、問難有るべし。彼此共に不平の心を挟むべからざる事
一 衆中の同志、此の会を催せば、則ち相互に宜しく講磨すべし。疑阻有るべからず。優なる者は自負すべからず。劣れる者は怒りを含むべからず。他所に在りて背語すべからざる事（『鷺峰文集』卷五一、門生講会式、明暦二年、上五三五頁）

翌年には、「講会」過程での注意事項を増補している。

一 後輩、前輩の講に陪すれば、則ち決して不満の心有るべからず。縦ひ前輩、後輩の講を聴くと雖も、倦怠有るべからず。心を書に潜めて以て之れを聴きて、其の善き者には

之れに従ひ、善からざる者は之れを改正すれば、則ち人の講ずる所も亦、己が講ずる所と何を以てか異ならんや。彼此の隔て有らずして、互いに相助け之れを長ずれば、則ち日新の功有らん。若し然らざれば、則ち講会、何の益有らん。(『鷺峰文集』巻五一、門生講会式、明暦三年、上五三八頁)

「衆中の同志」がお互い、疑問を出し合い、「講磨」するという「講会」は、後の時代の輪講だといってよいだろう。²³ 輪講とは会読の一つの形態で、講者と聴者を交換しながら、参加者が対等な立場で討論し合う共同読書の方法である。鷺峰の定めた「門生講会式」はその輪講規則だったといえるだろう。

対等性ということであれば、「門生講会」のなかには、鷺峰自身は参加しなかったようであるが、鷺峰の長子梅洞が入っていたことは注目すべきである。というよりは、鷺峰は長子教育の一環として、「門生講会」をとらえていたのではないかと思われる。明暦二年の「門生講会式」が書かれた時の「講会」について、羅山は初孫の梅洞を中心に述べていたからである。

丙申(明暦二年)七月三日聞く、向陽、生徒十余輩を聚め、之れをして朱子集註論語を説かしむ。各、圖を探りて之れが次序を為す。春信、論語の名義を誦誦すべしと。我、之れを塾に招く。諸生、侍坐す。聴者同じく席に在り。既にして小童、書格を捧つ。論語は其の版面に在り。春信、今年僅かに十四歳、格に対して書を開き、即ち微音に論語の

二字を唱え、乃ち述べて云く、云々²⁴ (『羅山文集』巻六四、嫡孫春信講論語名義大概)

弟子たち同輩の者たちの切磋琢磨のなかで、羅山と鷺峰は、林家の子弟教育を目論んでいたのではないか。鷺峰が子供たちを弟子同列に扱った点は、五科十等の制のなかでも貫かれていた。この点は、後に徂徠によって評価されている点である。

春斎時分ノ学寮ハ自分居屋敷ノ内ニ有之、内記(鳳岡)兄春信(梅洞)ヲモ五科ノ内ヘ入置キ、弟子共同然ニ励マセ申候。(『学寮了簡書』)

羅山と鷺峰は、親から子供、師から弟子への上下の関係の一方向的な教えではない、同輩同士の対等な関係のなかでの教育の有効性を認識していたといえるだろう。

三、五科十等の制

鷺峰の林家塾の教育方法のユニークさは、徂徠が特筆していたように、塾生の学習課程を定めた五科十等の制にある。五科十等の制とは、五科目の学習内容と塾生の成績・学力に応じた十段階の等級を設定した制度である。五科目とは、寛文六年(一六六六)の「忍岡家塾規式」では、経科・史科・詩科・文科・倭学科であるが、寛文一二年(一六七二)の「忍岡塾中規式」では、経科・読書科・詩科・文科・倭学科と定められている。『本朝通鑑』編集中に定められた寛文六年の「規式」の「史科」は、編集後には「読書科」に変更されたのである。これは、編集時

では歴史書に限定していたのだが、編集後には広く読書範囲を拡大させたのだろう。

こうした五科という幅広い科目を設定した一因は、公務としての『本朝通鑑』編集のために多くの人材を必要とするからであった。

夫れ大厦は一木の支ふる所に非ず。故に良匠の之れを営するに、衆材を聚めて以て其の功を成す。国史館の編輯は、諸れを大厦の殊に大なる者に譬ふ。余、其の事を営するに、各々其の才に因て之れを使ふ。賀璋は生徒の其の一なり。余、之れを挾びて、高安成と、其れに群生を誘導し、備書者を指麾せしむ。(『鷲峰文集』巻三六、送賀璋、寛文一一年孟春二一日、上三七五頁)

ただ、『本朝通鑑』編修の公務としての必要性のみならず、より根底的には、塾生個々の才能を伸長させようとして、できるだけ幅広い科目を定めたといえるだろう^⑧。塾生にはそれぞれ得意とする科目があるからである。実際、編集作業の過程で、塾生の学力はアップしている、と鷲峰は認識していた。

之れを要するに各々史館の盛拳に遇ひて、諸れを起筆の時に比ぶれば、則ち稍、具眼の者有り、進歩する者有り、志を励ます者有り、未至り跂たて望む者有るときは、則ち龍吟して雲起り、虎嘯きて風生するの彷彿か。安んぞこの裏、驥馬同槽の者に非ざることを知らんや。豈に藩鷄鶴枝を以て自ら足れりと為んや。況や間、亦た簋仕し禄を于むる者、

其の中に在れば、則ち日新の進んことを期さん。書錦榮旋の者有らば、則ち我も亦喜び、且つ以て一楽と為ん者なり。

〔『鷲峰文集』巻一五、館生郷里記、寛文九年、上一八八頁〕この五科のなかに、甲から癸までの十等の序列・等級がつけられた。十等の等級は細分化されたもので、大きくは、甲・乙・丙は上等の「特生」、丁・戊・己は中等の「萌生」、庚・辛・壬・癸は下等の三段階に分けられた。寛文一二年の改正では、「末学の歩を進むるの道と為」すために、十等の下に新たに「末生」の級を定めている^⑨。

塾主曰く、五科十等は、塾中の式なり。特生は上等為り。己等より丁等に至るまで、中等と為し、萌生と称す。萌生も亦た差有りて、座次を定む。庚・辛・壬・癸を下等と為す。次第自ずから分明なり。未だ癸等に列せざる者は、是れ末生なり。〔『鷲峰文集』巻一五、塾生序齒記、寛文一三年正月、上一九二頁〕

さらに、学力の序列に応じて塾内での職制が定められた。五科ともに、最上級の甲等に昇った職位は「大員長」と呼ばれ、定員はなかった。塾内の実質的な事務を担当するのが「員長」である。これは、「左員長」「右員長」「権左員長」「権右員長」の四職位があつた。この「員長」の仕事は、「諸員、講解を求める者有らば、則ち筵を開くべし」「諸員、疑問有らば、則ち就て之れを正す」「諸員の詩文・草稿、之れを訂正すべし」「毎科、諸員、歩を進むる者有らば、則ち漸く試みて、之れを推挙すべ

し。親疎偏党の私有るべからず」(『鷺峰文集』卷五一、忍岡家塾規式、上五三九頁)と、講義、学習指導、添削、試験であった。塾運営の中核を担ったのである。梅洞が左員長、人見友元が右員長、坂井伯元が権左員長、鳳岡が権右員長となった。

この員長のほかに、「員実生」「員特生」「員秀生」「萌生」があった。ただ、寛文六年の五科十等の制成立時には、員実生・員特生・員秀生についた者は誰もいなかった。『本朝通鑑』編修のための国史館には、編集要員として三〇余名がいたのだが、萌生は、春沢(経科)、南直(史科)、賀璋・高庸(詩科)、安成(倭学科)で、文科の萌生は誰もいなかった(『日録』寛文六年四月二七日条)。ちなみに、『本朝通鑑』編修後の寛文一三年正月段階では、以下の三八人である(『鷺峰文集』卷一五、塾生座次記、寛文一三年正月一四日、上一九二―一九三頁)。年齢については、「塾生序齒記」(『鷺峰文集』卷一五、寛文一三年正月一三日、上一九一頁)による。

上等(甲・乙・丙) 特生

高安成(四七歳)、倭学に精しく、倭学科で丙等。ただし読書科では萌生。

中等(丁・戊・己) 萌生

賀璋(三三歳)・村願言(二七歳)、詩科とともに丁等、読書科と倭学科でも萌生。

林櫨(一九歳)、詩・文両科で萌生。

仲龍(三四歳)・田植(二五歳)、読書・詩両科の萌生。
石習(二五歳)、倭学・読書科の萌生。

林泰(二三歳)・島周(二五歳)、読書科の萌生。
和堅(一七歳)・三復(二一歳)、詩科の萌生。

下等(庚・辛・壬・癸)

安悦(二七歳)、庚生

村止(二七歳)・止鶴(二七歳)、ともに辛生。

森黙(四四歳)、辛生、啓事に列す。

島立志(二一歳)、辛生、啓事に列す。

石員(二五歳)・江良言(二二歳)、読書科とともに辛生。

谷成(二二歳)、詩科で辛生。

施定(二〇歳)・吉坦(二〇歳)、村喬(一九歳)、ともに詩科で辛生。

平頭(一七歳)・原清(一五歳)、ともに詩科で壬等。

小出良達(一六歳)、癸生。

末生

木忠重(二九歳)、松直秀(二四歳)、津宗哲(二二歳)、関

祐甫(二一歳)、本玄了(二〇歳)、平正真(一九歳)、柳秀

重(一九歳)、浅益(一八歳)、桶吉明(一七歳)、馬守安(一七

歳)、野仙(一六歳)。

小童

水友生(一四歳)、岡宗允(一四歳)

ところで、五科十等の制の創設の大きな意図は、塾生たちの学問への動機づけにあった。先に述べたように、林家では博聞強記を学問の目標にしていた。とくに五科十等の制が定められた『本朝通鑑』編修時には、公務として博学が必須だった。しかし、私的な時間に得意分野とはいえ、学問に励むことは誰もがでることではない。そうした困難があったからこそ、鶯峰は、塾生間に等級をつけることで、学問への動機づけを図ったのである。鶯峰は塾生の序列を記した文を見て、諸生が発奮することを期待している。

今此の記を見て、其の座次を考ふるときは、則ち才の短長は生の前後に拘らずして自ずから知るべきか。塾生等、此に激起し、此れに羞惡するときは、或は中等より上等に至り、或は下等より中等に至り、或いは末生と雖も、其の等、漸く進むべく、今日の短も他日の長と為り、今日の卑も亦た他日の高を見ん。若し然らざれば、短なる者は益ます短、卑き者は益ます卑からんか。又た勉めて倦まず、進みて止まざる者有るときは、則ち其の長を増し、其の高を加えて、其の遠大、以て期すべきか。〔鶯峰文集〕卷一五、塾生序

蘭記、寛文一三年正月、上一九二頁
面白いことに、鶯峰は諸生徒間の競争を肯定していた点である。

曰く、諸生各々其の事を事とす。就中誰か其の最と為すか。曰く、方今、競ひ馳せて鹿を逐ふの時なり。勤めて怠らざ

れば、則ち駑駘と雖も、或は其れ追ひ及ばん。怠りて勤めざれば、則ち駿足と雖も、得ること能はず。提拏漸く老ひて、須臾の躊躇無きときは、則ち駿と無く駑と無く、豈に鞭の影を望まざるや。士忤怩として曰く、汝が語る所の件、必ずしも吾を戒めずと雖も、覚えず吾が顔に汗す。他れ後、館中の後世童男、若し秀出する者有らば、先進壮士の面目之れ有らん。吾も亦た如今より後、放蕩の行を絶ち、奮発の志を励まさん。〔鶯峰文集〕卷一五、懶士入館記、寛文九年十一月、上一九〇頁）

塾生の詩は、優劣相易ると雖も、畢竟、等の高き者と等の卑き者との分有るか。卑き者、偶々勝つと雖も、妄りに自負すべからず。高き者も亦、卑き者を輕侮すべからず。若し自負すれば、則ち蛙の井に居て、大を知らざるが如く、輕侮すれば、則ち鰭の蚌に於けるが如く、必ず失ふ所有らん。之れを戒むべく、之れを慎むべし。嗚呼、其の卑き者は虻蜂の類なり。豈に能く樹を撼さんや。高き者は猶ほ是れ燕雀の徒なり。未だ鴻鵠の志を知ること能はず。然れども一步を進めざれば、則ち千里を跋ること能はず。三級を凌がざれば、則ち竜門に登ること能はず。方今、塾生等、居然として以て卑きに安んずれば、則ち何を以て高きを望まんや。邇きよりせざれば、則ち遠きに往くに由無し。然らば、其の漸漸、等に進むも亦、豈に益無しと謂ふべけん

や。勤めて懈らざれば、則ち或は其の優なる者、弥いよ優れて、一定の驗有らんか。歳聿に暮れぬ。來年は今年より進むを待ち見ん。(『鷺峰文集』卷四四、論塾徒、延宝元年臘月、上四六二頁)

從來、學問の競争は徂徠學になつて容認されるようになったと考えられてきたが、鷺峰の林家塾ですでに奨励されていたことは注目すべきである。冒頭に述べたように、徂徠が鷺峰の「教方」を高く評価したのも、博學を求める學問のあり方とともに、諸生間の競争を容認していた点にあつたのかもしれない。それはともかくも、實際、等級が上がつた者を見て「羨む」ことが、自分もそうありたいというやる氣につながつていたようである。

春信・友元・伯元、昨日の詩卷を細評し、賀璋の綠陰詩・蘇晉詩、正竹の綠陰詩、顧言の魚兒詩を標出し、猪(緒力)尾に、儘佳の二字を加へ、之れに四員長の印授を押す。館生皆、之れを羨む。定科の後、初卒、激励の一端なり。(『日録』寛文六年五月二日条)

員長詩判。村顧言(中村顧言)、庚等より進みて己等と爲す。詩科萌生に列す。彼、毎月進歩す。諸生皆、之れを羨む。(『日録』寛文六年六月六日条)

こうした等級の序列づけばかりか、さらに、徂徠の『学寮了簡書』によれば、「学寮へ被下候百人扶持ヲ書生之内ヲ吟味シテ、

階級ノ登り候ニ随ヒ扶持ヲ段々ニ増シ、一人半扶持ヨリ七人半扶持迄増シ申候^②とあるように、等級によつて扶持米に差を与えて、等級上昇の動機づけをしたのである。これは、少ないながらも、學問の「進歩」が禄高の上昇に結びつくことを意味した。鷺峰は弟子たちに、學問をすれば、禄を得ることができると繰り返していた。「所謂る学べば、則ち禄其の中に在る者か」(『鷺峰文集』卷三六、示村顧言、寛文九年、上三七七頁)、「所謂る学べば、則ち禄其の中に在り」(『鷺峰文集』卷三六、送賀璋、寛文十一年孟春二日、上三七五頁)。その意味で、宮殿や美女には遠く及ばないとはいへ、先に見た學問をすれば、物質的利益が得られるという「勸学文」の一部だけは実現していたといえよう。

學問をしても立身出世できない世界のなかで、學問上のやる氣を喚起する五科十等の制は、一つの大きな困難を抱えていた。それは、進級を判定・査定する評価の難しさである。五科のうち、詩科・文科では、「儘佳」詩文数を多く作ることで、経科・史科・倭学科の三科では、五科十等の制の成立当初、「試」を行うことで進級できると明記していた。

一 経科・史科・倭学科は漸く之れを試み、其の効の見るを待ちて、一等を進むべし。

一 文科は其の作る所、儘佳なる者、五篇に及ぶときは、則ち一等を進むべし。若し群作に冠なる者有らば、則ち一篇は五篇に當るべし。

一 詩科は其の作る所、儘佳なる者、上等に在りては、則ち絶句二十首、四韻律十首、六韻律以上七首に及ぶときは、則ち一等を進むべし。若し群作に冠なる者有らば、則ち絶句四韻は五首、排律は三首は、絶句二十首に当るべし。但し排律二十韻以上の古詩、五十韻以上は、其の時に臨みて、之れを議すべし。中下等に在りては、則ち儘佳なる者、絶句十首、四韻律五首、六韻律以上三首、其の一等を進むべし。〔鶯峰文集〕卷五〇、忍岡家塾規式、寛文六年四月二十四日、上五三九頁

文科では、「儘佳なる者」五篇を作ること、一等進むことができた。ただ優秀作であれば、その一篇が「儘佳なる者」五篇に相当するという。詩科では、上等にいる者であれば、「儘佳なる者」絶句二〇首、四韻律（律詩）一〇首、六韻律以上（排律・古詩）七首を作れば、一等進めた。また、経科・史科・倭学科の「試」とは、試験管の員長が試問という形で、文章を提出させる方法である。これは、羅山が子供の鶯峰や読耕齋に与えていたものと同じである。林家独特の教育方法だったといえる。ただ、五科のうち、当初から詩科に進級者が偏りがちであったという。

唯だ詩科稍や盛ん、其の余の四等（科力）は進歩者無し。（『日録』寛文六年六月朔日条）

詩科が盛んなのは、林家の学問のあり方に因るが、それ以上に、評価の難しさがあったと思われる。『本朝通鑑』編修完

了後に、鶯峰は次のように述べている。

客曰く、聞くならく、塾建ててより以来、読書・詩文を以て等を進むる者有り。未だ倭学を以て進む者を聞かず。況や経科に於いては、則ち中等に列する者、未だ之れ有らざるは、何ぞや。童子答へて曰く、此れ我の知る所に非ず。（中略）読書は其の数、歴歴分明、詩文は一覧するときは、佳不佳、了然たり。故に此の三科は、日に試み月に進みて、前後の輩に拘らず、少壮の齢に限らず。其の優劣を正し、其の多寡を考え、私を其の間に容れず。苟も三科に於いて、博聞の效有り、文字の法に通ずるときは、則ち経科の進、倭学の熟するも、亦待つこと有るのみ。（『鶯峰文集』卷一五、塾生座次記、寛文一三年正月一四日、上一九三頁）

文科と詩科では「佳不佳、了然」である。よい詩文を幾つ作れたかは、「其の多寡を考」えれば、明確に判定できるという。数量で客観化できるからである。ところが、試問を課した経科・史科・倭学科の三科は、試問の解答を評価する基準のあいまいさがつきまとう。そのために、経科・史科・倭学科の三科の内、寛文一二年に「史科」が「読書科」となつてからは、「上等に在る者は百冊を以て限りと為す。中等に在る者は七十冊を限り、下等に在る者は五十冊に限る。初等科外は三十冊を限りて、各々、一等を進むべし」（『鶯峰文集』卷五一、忍岡塾中規式、寛文一二年正月、上五四〇頁）と、読書した書物の冊数によつて客観的に判定するようになった。もちろん、この冊数はただ

漫然と読むだけではなく、暗誦する程にマスターすることを意味していたろう。それにしてもここから窺われることは、経科や倭学科に課せられる「試」の公平性・客観性を確保することの難しさである。

すでに五科十等の制成立の時点で、評価の公平さの問題が認識されていた。五科十等の制を相談しているなかで、評価を担当する員長四人が、「各々、諸生を引誘し、私有るべからざるの旨、相誓」ているからである。

館事畢りて後、信・常・二元と胥議し、五科十等の品藻決す。信、左員長為り、友元、右員長為り、伯元、権左員長為り、春常、権右員長為り。各々、諸生を引誘し、私有るべからざるの旨、相誓ふ。頃間、此の席に他人を容（原文は客）れず。事、既に決す。故に賀璋をして規式を清書せしむ。（『日録』寛文六年四月二四日条）

「信・常・二元」とは、梅洞（春信）・鳳岡（春常）・人見友元（竹洞）・坂井伯元である。諸生に五科十等の規則と諸生間の序列がはじめて発表された時、四人の員長の公平さを期すという誓紙が読まれて、諸生は「皆悦」んだという。

申刻の後、諸生を聖堂に集む。各々深衣を着し列坐す。簾を揚げ、余、正面に向ひ上香し、再拝し東方に着座し、諸生、西方に着く。高庸をして規式を読ましむ。又、員長・員実生・員特生・員秀生・員萌生の次第を読む。而して後、春常、五科十等及び、初科品目を読み退く。員実・員特・

員秀は、未だ其の人を得ず。萌生は、則ち春沢（経科）・南直（史科）・賀璋・高庸（詩科）・安成（倭学科）、文科の萌生は、未だ其の人を得ず。既にして、下廉す。（春沢・仲龍・安成・賀璋）事畢りて皆帰館す。而して後、春信、童科の者を召し、示論の趣有り。次に四員長の誓詞を出し、以て諸生に示す。諸生皆悦ぶ。既にして衆皆去る。（『日録』寛文六年四月二七日条）

こうした公平性はどこで担保されるかといえは、ひとえに評価を担当する員長いかによっている。成立当初の五科十等の制において、この公平性を担保する重要な役割をはたしたのは、四人の員長のなかで最高位を占めた、鷺峰の子梅洞だった。五科十等の制以前から、先に見たように、梅洞は、鷺峰が弟子たちの間に促していた「門生講会」のなかで切磋琢磨し合っていた。そのために、梅洞は羅山・鷺峰が将来を嘱望された才子であるとともに、人格的にも諸生たちの間で慕われていた。鷺峰は次のように回想している。

汝が志、其の分に応じて之れを教育せんと欲す。諸徒の中、若し一科に長ずる者有れば、則ち之れを推挙し、自ら其の才に誇らず。故に諸徒皆、其の公正を知るなり。且つ奴婢の賤しきと雖も、纔かに字を知り、俗書を習ふ者は、乃ち之れを褒め、筆墨の料を与ふ。人皆、其の鄙賤を捨てざるを喜ぶなり。然れども其の心に称はざること有れば、則ち員長の列と雖も、之れを諷し、諸生に至りては、則ち之れ

を激励し、侍坐の者は、則ち之れを誡め、之れを責む。其の才を自負する者は之れを抑へ、醇厚にして言寡き者は、之れを揚ぐ。〔鷲峰文集〕巻七七、西風淚露上、下二〇九頁）

また、梅洞と朋友・同志の關係にあつた（共に読耕齋に親炙していた）人見竹洞（友元）も、その人となりを次のように評している。

其の人と為りや、貞静沈黙、温惠愛人、起居方正、言語端直。寛裕迫らず、謙遜居らず。過れば、則ち之れを改むるを憚らず。人の善なる者を見れば、欣然として之れを挙げ、人の過つ者を見れば、戚善として之れを戒む。〔竹洞人見先生後集〕

梅洞は自らの才を誇らず「謙遜」し、諸生たちはその「公正」を信頼していたのである。五科十等の評価は、この梅洞個人の「公正」に依存するところが大きかったと思われる。

そもそも、五科十等の成立を推進したのは、他ならぬ梅洞だった。梅洞が五科十等を主導したことは、鷲峰が『西風淚露』で回想している。

今夏、余、汝が固く請ふに因て、私に經・史・文・詩・倭学の五科を設け、十品を分ち、甲より癸に至る。各々其の才を量りて之れが次第を為す。且つ四員長を置きて、以て之れが教授を為す。汝、員長と為りて以て之れを指揮す。親疎の私有らず。是に於いて、此の地、三十余年を経て、

祭儀・教化共に成りて、初めて真の学校と為る。皆是れ汝の挙ぐる所なり。〔鷲峰文集〕巻七七、西風淚露上、下二〇八頁）

それは、『国史館日録』でも確認できる。五科十等の制が創設された寛文六年四月の日記には次のように記されている。

夜に入り、信・常と胥議す。立經・史・文・詩・倭学の五科、館中の僚属生員を商量し、十等を定む。邇日、二元と之れを議決すべし。〔日録〕寛文六年四月二二日条）

夜に入り、信・常侍す。五科十等の規式を草す。先考の忌日の日に依り創む。常、執毫す。〔日録〕寛文六年四月二三日条）

梅洞が中心になったことの意味は大きい。林家塾内での朋友・「同志」間の相互批判の会が成り立ち、評価するためには、中心メンバーの卓越性・指導性が不可欠だからである。彼が早世した後に、そのことが明らかになる。というのは、寛文六年九月の梅洞の亡き後、五科十等の制は開店休業状態になったのではないかと推測されるからである。林家塾外からも、梅洞亡き後に存続できるか、心配する声があがっていた。

勿斎（加藤明友）、予に問ひて曰く、家塾規式五科十等の品、今猶ほ之れを廢せざるや否やと。予曰く、何ぞ之れを廢せん。然れども此の事、春信の興す所なり。予は只、其の大概を統ぶるのみ。彼の没後、予は修史の外、百事皆廢す。

春常は専ら春信集を編むことに勞す。且つ九十日間、国俗の服次なり。故に常に韻語を作るの心無し。其の服、未だ畢らず。又喪に逢ふ。予及び春常、憂心不平なり。僚属及び生徒も亦た風雅の興無し。此の後、科等の興ると興らざるとは、三員長の心に在り。然して館中・館外の徒弟、其の宗とする所は春信なれば、則ち未だ三員長に帰服するや否やを知らず。其の列既に異なれば、則ち誰か面受せざらんや。然れども其の中心帰服するは、強ひて命じ難き所なり。勿齋、攢眉の嘆き有り。『日録』寛文六年二月七日条

「館中・館外の徒弟」は梅洞という個人に帰服していたが、梅洞亡き後、残りの三人（鳳岡、人見友元・坂井伯元）の員長に塾生が帰服するかどうかは、鷺峰も分らないと考えていた。ここからも、梅洞の存在が大きかったことが察せられる。しかし、梅洞没後も、何とか五科十等は存続することができた。その存続を願ったのは他ならぬ塾生たちだった。残された員長の人見友元と坂井伯元の二人が、梅洞の座に鳳岡を推したのだが、初め、鳳岡は躊躇したようである。

友元歳末を来賀す。且つ曰く、昨、伯元と議す、来春、講筵を興し、且つ科等の事を再挙することを。然らば則ち春常に春信の座に代わるを請ふ。信に此の事、去月より屢、相ひ議すと雖も、春常肯んぜず。故に遅引す。然らば館徒の意、皆此の如く欲す。然らば則ち館外の徒の思ふ所も此

の如くなるべし。且、公儀も亦、春常を遇すること、春信の如くすべし云々。余曰く、衆議に任すべし云々。此の事、二元先に是非、此の意無し。然して前日、高木氏の席上、頻りに此の事に及ぶ。故に二元意を決して爾云ふ。既にして友元去る。『日録』寛文六年二月二九日条

鷺峰は「衆議に任すべし」と塾生に最終判断をゆだねたのだが、幸いにも寛文七年正月に、塾生たちの詩の批評を行い、五科十等の制は存続できた。鷺峰は「感慨」を抱かざるをえなかった。

今日の事（群詩批評）、弥感懷を添ふ。然して是れ亦、教育の一端、之れを廢すること能はず。春信没後、十余句を踰えて、始めて此の事に及ぶ。館中、最上座を闕く。痛ましいかな。『日録』寛文七年正月七日条

五科十等の制は「教育の一端」として林塾の教育制度の要として、梅洞死後も存続したのである。『国史館日録』のなかで、五科十等の制の記録の最後は、延宝三年二月二九日条である。そこには、「申刻に及び、北塾に赴く。塾試なり。直三、詩科辛右等、読書科壬等に進む。其の外、末生二三人、初めて等外に入る。『日録』延宝三年二月二九日条」とある。

では、いつまで五科十等の制は行われていたのだろうか。梅洞の一三回忌には、鳳岡が「家塾仍旧風、五科追先例」^③（『鳳岡全集』巻五）とあるが、梅洞死後四八年の時点では、「時移人心改、寮塾廢五科」^④（『鳳岡全集』巻五）とある。梅洞は寛

文六年（一六六六）に死んでいるので、正徳三年（一七一三）にはすでに廃れていたことになる。但徠が述べていたように、林家第三代鳳岡の時代に、五科十等の制は廃止されていたことは間違いない。

四、私塾から学校へ

ところで、五科十等の制は、たんに塾生の学問への動機づけのみが目的だったわけではなかった。実は、鷺峰と梅洞にはもっと遠大な構想があった。そのことが窺われるのは、『国史館日録』の次の条目である。

館事畢りて後、二元・高庸、常室に在りて談ず。既にして春信、交席す。余も亦会す。談闌なり。相互いに心を隔てず、諸門生を議し、甲乙科を分つ。学進み、逐次、科を超越るを待つ。且つ其の才を品評して以て激励す。戊戌に及び、各々退去す。今夕、議する所、学業を勧めんと欲し、先私に試みて、後に公挙の万乙を期するが若き者なり。（『日録』寛文六年四月一八日条）

五科十等の制は、まず林家塾という「私に試みて」、最終的には「公挙」＝科挙の実施を目指すものであったのである。この点は、五科十等制の創設を主導した梅洞の構想でもあった。鷺峰は次のように記している。

もともと、鷺峰は、法印・法眼のような僧位ではなく、「学者仕宦の次第」である「進士・俊士・選士・秀士」などの称号

を、『本朝通鑑』編修後に期待していた。鷺峰は、先に触れたように五経講義終了したことで、弘文学士の称号を得ていたのだから、その願いもかなえられる可能性もないではなかった。ただ、その前に、その「名」に相応しい「実」を行っておく必要がある、と梅洞が提言した。鷺峰が、「若し願ふ所の志遂ぐれば、則ち汝、以て何とか謂はん」と尋ねたとき、梅洞は次のように答えたという。

若し然らば、則ち名正しく志立ちて、平生、学ぶ所の者、足る。何の願か、之れに加へん。然れども新議、容易なるべからざらんか。名は実の資なり。如かず、先づ其の実を勤めんには。其の名を得、位を受くるは、遅しと為さざるなり。汝が此の答に由りて、五科十等の事、興る。（『鷺峰文集』卷七八、西風淚露中、下二二五～二二六頁）

まず五科十等制の実施によって、「実」を勤めることで、「名」も後からついてくるというのである。五科十等の制が将来の科挙実施の準備だという認識は、鷺峰と梅洞のような林家の人々ばかりか、弟子たちの願いでもあった。鷺峰はそれを書きとめている。

高庸談じて曰く、昨、経歴の路、南直（深尾春庵）を過ぐ。直、病漸く愈る。甚だ規式の精を感じ、且つ曰く、員長・員実・員特・員秀・萌生の品故、此れより古を作す。若し国学の挙有らば、亦た此の法を易へずと。珍重珍重。（『日録』寛文六年五月六日条）

敢て問ふ。詩合せの遊び、唯だ病間の寂を慰するのみか。或は其れ期する所有るか。萌生答えて曰く、中華、詩を以て士を取るは、置きて論ぜず。昔、延喜の馭寓、詩を試みて官を授く。其の後、詩を論じて甲乙丙丁の科を試む。朝廷、衰廢してより以來、其の事久しく罷む。方今、塾主、之れを再興す。豈に其れ徒らならんや。若し奎運の図に膺ること有らば、則ち家塾の試は、群国に推すべき者、必せり。若し果して今に行はれざれば、則ち後世に於いても亦た、科挙の小補と為らんか。此れ吾の念ずる所なり。知らず、塾主は何をか謂はん。〔鷺峰文集〕卷六三、詩合問答、寛文一二年六月二八日、下八一頁

五科十等の「試」問は、「群国」に拡大することを目指し、後生の「科挙の小補」となることを期待しているのである。

さらにいえば、『本朝通鑑』編集事業の国史館は、官立の学校へと発展することが期待されていた。幕閣のなかにも、それを認める意見があった。鷺峰はそうした幕閣の学校への前向きな発言を丹念に記録していた。たとえば、『本朝通鑑』編修奉行であつた若年寄永井尚庸との間の会話である。

日を隔てて尚庸、余に謂ひて曰く、閣老皆謂ふ、編録成れば、則ち宜しく学校を営み生徒を教ふべしと。足下に非ざれば、則ち誰か其の師と為らん。宜しく保衛し以て後榮を期すべしと。余曰く、若し然らば、則ち国家の盛挙なり。

然れども余、今、微身を以て大任を承らば、則ち他事期し難しと。尚庸曰く、千里も、一步より始む。成功亦遠からずと。足下、唯だ願養を以て要と為して可なり。云々。〔日録〕寛文四年八月二一日条。

ほかにも、老中稲葉正則も鷺峰に次のように語っていた。

拾遺曰く、通鑑の事畢れば、則ち学校を興さんと欲す。然れども独断の事に非ず。未だ群議一同するや否やを知らずと。余、五科十等の事を談ず。拾遺曰く、恰も好しと。〔日録〕寛文八年正月二五日条

永井尚庸、稲葉正則はともに鷺峰の擁護者であつた。ただ、こうした期待があつたにもかかわらず、『本朝通鑑』完成後、鷺峰は中央の「国学」を目指していたのだが、現実には地方の「州学」にも届かなかつた。

今冬、本朝通鑑全部の功成るは、乃ち是れ官事の整なり。頃間、南北の塾を営み、五班の徒、聊か州学に擬して以て儒風を仰ぐは、乃ち是れ家業の整なり。〔鷺峰文集〕卷三、整字記、寛文一〇年、上七八頁

しかも、「州学に擬する」ことしかできなかった。幕府は、寛文一〇年一〇月に国史館は撤去するに及ばず、今後は学寮として使用するようにと命じ、『本朝通鑑』編修のために国史館に支給されていた九五人扶持の月俸を門人育成料として下賜した〔日録〕寛文一〇年一〇月二三日条。先に見たように、「所謂る学べば、則ち禄其の中に在る」ことを実現するべく、鷺峰

はこれをもとに、三〇名内外の塾生の学力段階に応じて分配したのだが、「今日の忍岡の家塾、他年、国学再興の端と為らん。是れ仰ぎ望む所なり」(『鷺峰文集』巻六六、冬至告文、寛文一〇年十一月、下一〇七頁)と自ら慰めざるをえなかったのである。

おわりに

最後に改めて確認しておきたいことは、上野忍岡の林家塾は学者教育を目的としていたという点である。立派な武士になるべく、武士一般を教育しようとしたわけではない。あくまでも、この時期、幕府・大名家に求められていた「物知り」の儒臣^②学者を教育しようとしたのである。この点で、鷺峰と同時代の山鹿素行の士道論とは大きな違いがある。^③ただ、学者教育とはいえ、また公式な幕府の学校ではないとはいえ、私的な学校が成立したことは、思想的に見て大きな意義を有している。

そこは、対等な人間関係のもとにして、学力・実力が競われる空間だったからである。鷺峰は「門生講会」のなかでは、「衆中の同志、此の会を催せば、則ち相互に宜しく講磨すべし。疑阻有るべからず。優なる者は自負すべからず。劣れる者は怒りを含むべからず」と説いて、同志間の切磋琢磨を奨励していた。林家塾では、五科にわたって、それぞれ得意科目を競い合い、劣っている者は優れた者を「羨」み、より上を目指そうと学問する、世間とは別の空間が成立した。学問に志す朋友が、お

互い「同志」として学び合う空間であった。そこは、無学な人々の江戸幕府のなかにあつて別世界であつた。鷺峰は、江戸城内で下向した勅使饗応の猿楽の催しがあるのを聞いて、次のような感慨を述べている。

今月の初め、勅使参府す。登城、饗応例の如し。又聞く、去月以来、猿楽しばしば之れ有り。然れども館中、城を去ること、遠からずと雖も、是れ一天地を別にす。世上の事は、曾て知らず。日々記事、夜々考書す。外人、以て勞すべしと為すも、然れども却て、利奔名走に比せば、則ち安し。人、我を嘲る、我、他を笑ふ。(『日録』寛文七年三月一日条)

鷺峰は、「利奔名走」の江戸城に遠くないところに「一天地を別」にする空間を作り上げたのである。

こうした「一天地を別」にする私的な空間で、対等な同志間の関係が成立し得た理由にはいくつかあるだろう。一つは『本朝通鑑』編修のために国史館に多くの若い塾生が集まったことが挙げられるだろう。この時期、「物知り」としてしか遇されなかった儒学者たちが、経済的保障を得て、公務のほかに私的時間をもつことができたのは、国史館という特殊な空間だったからだといえるだろう。同世代の俊才が、『本朝通鑑』編修の傍ら、お互い切磋琢磨できた意義は大きい。この時期、『本朝通鑑』編修の余暇に、林家塾では、「等質でかなり高度の教養と意識を共にする人材を一〇人、二〇人と揃え^④」ていたからこ

そ、詩会を開き、詩作を競い合うことができたのである。

しかし、それゆえに、『本朝通鑑』編修という事業という条件がなくなつたとき、鷺峰の林家塾は衰退せざるをえなかつた。塾生はバラバラになつてしまつたのである。塾生たちは、就職口を見付けて全国諸藩に仕官していった。林家の入門者名簿『升堂記』のなかの羅山・鷺峰の部によれば、三一〇名の登録者のうち、「旗本・御家人」五名、「藩士」八三名である。この八三名の内、藩儒となつて藩の教育にたずさわつた事実が明らかなのは二〇名ほど、一三藩に散在している^④。このなかで、『大日本史』編集を始めた水戸藩のように、『本朝通鑑』編修の経験が歴史書編纂に活用できた者もいたが、多くは「物知り」学者となつたといえるだろう。鷺峰は国史館に勤めるある弟子に次のように論している。

汝、其の勞して倦むこと無ければ、幸と為して、悦ぶべし。況や其れ百の十を臆記して、大概を熟誦して、郷国の話轡と為れば、則ち父母の顔を怡ばしむること、亦た樂しからずや。邦君の世子、本朝の故事を談ずることを好むと聞けば、則ち或は其れ榮達の端と為るも、亦た知るべからず。努力して懈ること無かれ。〔鷺峰文集〕卷三六、与石習、寛文九年、上三七八頁

それは、父母や世子の談話の題材を与えるものにし過ぎない。鷺峰のいう「無用の用」である。結局、三代目の鳳岡の代になつて、歴史編集事業がなくなつたとき、林家塾も衰微する

ことになる。梅洞のように弟子たちを公平・客観的に評価できるものもいなくなつたうえに、徂徠が指摘しているように、林家当主が弟子たちと居宅を分離したこともその一因であらう^⑤。林家当主が弟子たちを監督することができなくなつたとともに、子弟を同輩の間で教育できなくなつたのである。

しかし、鷺峰の林家塾の教育法、五科十等の制は『本朝通鑑』編修という特殊な条件の下で成立することができたにしても、『門生講会』における対等な関係での切磋琢磨しあう場は、大きな思想的な意義をもっている。というのは、『学寮簡書』を書いた徂徠は山崎闇斎流の講釈を批判し、会説を奨励することとで、「全備」と評した林家塾の教育法を再生させることになるからである^⑥。

(1) 『荻生徂徠全集1 学問論集』(みすず書房、一九七三年) 五六五頁。

(2) 林家塾に関する従来の研究には、石川謙『日本学校史の研究』(小学館、一九六〇年)、和島芳男『昌平校と藩学』(至文堂、一九六二年)、吾妻重二『江戸初期における学塾の発展と中国・朝鮮』(『東アジア文化交渉研究』二号、二〇〇九年)、揖斐高『江戸幕府と儒学者』(中公新書、二〇一四年) 参照。

(3) 『藤原惺窩 林羅山』(日本思想大系28、岩波書店、

一九七五年）三三九頁。

(4) 同右、二〇六頁。

(5) 前掲『荻生徂徠全集』五六五頁。

(6) たとえば、江戸期の儒者列伝の書『先哲叢談』には、「羅山、治博にして、天下の書に於て読まざる無し」（源了圓・前田勉訳注『先哲叢談』、平凡社東洋文庫、一九九四年、三七頁）とある。同様に、鷲峰についても、「春齋、豪材博識にして、専ら力を述作に用ふ」（同右、四一頁）と評している。

(7) 『鷲峰林学士文集』（日野龍夫編、近世儒家文集集成12、ペリカン社、一九九七年）巻上、二二二頁。以下、引用頁数は本文中に略記する。

(8) 鷲峰は直接に山崎闇斎を指弾していないが、闇斎を念頭においていたであろうことは、『先哲叢談』でも指摘されている（前掲東洋文庫、四三頁）。

(9) 江戸期の学者の社会的地位については、拙稿『儒学・国学・洋学』（『岩波講座 日本歴史』巻一二、岩波書店、二〇一四年）参照。

(10) 真田増督『明良洪範』（国書刊行会編、一九二二年）四頁。

(11) 『中江藤樹』（日本思想大系29、岩波書店、一九七四年）一三頁。

(12) 『国史館日録』のテキストは、山本武夫校訂『国史館日録』第一―第五（史料纂集、続群書類聚完成会、一九九八年）

二〇〇五年）を使用した。以下、『日録』と略記する。

(13) 鷲峰の「一能子伝」については、揖斐高「自己イメージの視線―林鷲峰の「一能子伝」について」（『日本文学』五一巻一〇号、二〇〇二年一〇月、『近世文学の境界』所収、岩波書店、二〇〇九年）参照。幕府内での儒者の不遇感は、鷲峰以上に羅山のものでもあった。羅山の不遇感については、拙稿『林羅山の挫折』（『近世日本の儒学と兵学』所収、ペリカン社、一九九六年）参照。

(14) ただし、鷲峰は、無学な幕府内の人々には『本朝通鑑』の価値は理解できないことを知っていた。鷲峰は弟子との次のようなやり取りを自嘲気味に記している。「友元曰く、執政、学を好まざれば、則ち一覽に及ぶべからず。然らば、則ち各数年の労は、無益に似るか。余笑ひて曰く、国史の編は唯是れ卿等の幸なり。若し官事に非ざれば、何ぞ本朝の書に通達するや。何ぞ執政の見た見ざるとに苦しむや。卿、平生の勤め足らず、従前の学を以て茲に念ずれば、則ち不審、国史成就の後、卿及び伯元等、一覽の功を終えるや否や。如庸・貞等は則ち不足と云ふ。友元、黙す。然れば主人も亦言はず。余曰く、温公通鑑成りて後、全部を周覧する者は、当時、王勝之等のみ。其の余は、巻に対して倦眠する者多し。況や今の人をや」（『国史館日録』寛文六年三月二七日条）。

(15) 『林羅山文集』（京都史蹟会編、ペリカン社、一九七九年）八六一頁。

(16) 同右、七〇三頁。

(17) 『本朝通鑑』の編纂過程とその史学思想については、安川実『本朝通鑑の研究』（言叢社、一九八〇年）参照。

(18) 前掲『荻生徂徠全集1』五六六頁。

(19) 同右。

(20) 同右、五六六～五六七頁。

(21) ここでいう「己の為にする」は、先に見た山崎闇斎らの朱子学者のいう自己の道德的な完成を目指すという意味ではなく、「文義に通ずる」自己の博学のためという意味である。

(22) 鷲峰の『私考』と題された著作は、以下の通りである。『易啓蒙私考』、『易啓蒙私考』、『詩経私考』（寛文一〇年）、『周易五賛私考』、『周易程伝私考』、『周易本義私考』（寛文二年）、『春秋胡氏伝私考』、『尚書序私考』、『書経集伝私考』、『西銘私考』、『大学或問私考』、『通書私考』、『中庸或問私考』、『毛詩序私考』、『礼記私考』。

(23) 林家塾では規則が定められていた。時間順に列挙しておく。

「論諸生」（『鷲峰文集』巻四三、論諸生、承応二年、上四四四～四四五頁）。

「門生講会式」（『鷲峰文集』巻五一、門生講会式、明暦二年、上五三五～五三六頁）。

「月課式」（『鷲峰文集』巻五一、月課式、明暦三年、上五三六頁）。

「門生講会式」（『鷲峰文集』巻五一、門生講会式、明暦三年、上五三七～五三八頁）。

「忍岡家塾規式」（『鷲峰文集』巻五一、寛文六年四月二十四、上五三八～五三九頁）

「忍岡塾中規式」（『鷲峰文集』巻五一、寛文一二年正月、上五四〇頁）

(24) 揖斐前掲書一五八頁参照。

(25) 前掲『林羅山文集』七八〇頁。

(26) 前掲『荻生徂徠全集1』五六八頁。

(27) 弟子たちの間でも、出身を異にする者たちが「同志」（前掲「門生講会式」）となっている。地域的な割拠主義を超えていた。

諸生二十余輩、館中に従事し、袖を案頭に連ね、双飛の鳥の如く、同隊の魚の如し。其の郷里を問ふときは、則ち或は同じく、或は異なり。（『鷲峰文集』巻一五、館生郷里記、寛文九年、上一八八頁）

(28) 五科十等の制が『本朝通鑑』編修のための人材養成以上の意味をもっていたことは、その範囲にも窺われる。五科十等の制の範囲は、梅洞・鳳岡兄弟と国史館の諸生以外の人々（林家塾関係の人々）にも開かれていたからである。たとえば、田中止邱である（『日録』寛文六年五月六日条）参照。田中止邱については、『本朝通鑑』編集開始前に、鷲峰は編纂事業に加えたが、すでに小浜藩に仕えているために、

幕閣から反対があつて（編集となると、禄があたえられるので）、諦めたという経緯があつたにせよ（『日録』寛文四年一〇月二七日条）、五科十等の制は、塾生のみに限られていなかったのである。

(29) この点、徂徠は、五科十等の五科について、「是ハ人々ノ得手不得手有之候ニ付、夫々ノ得手候一向ヲ厚ク学ハセ候為ニテ、右之通り分ケ申候。（中略）古ノ聖人ノ門弟子ヲ教玉フ二人々ノ才ニ随ヒテ科ヲ分テ教玉フ筋ニ叶申候」（『学寮了簡書』）と、高く評していた。

(30) ただ、明文化されたのが寛文一二年であつて、それ以前、十等の下に「初等」が置かれていた。「春常、五科の品目を改定す。進む者有り、加ふる者有るに依るなり。松寿・尾退、初科より癸等に列し、鶴丹・森黙及び次房等の三童は、初科に列す。凡そ癸等の次に、初科・童科の二等有り」（『日録』寛文九年正月一五日条）。

(31) 拙著『江戸の読書会』第四章2「私塾の会読と競争」参照。

(32) 前掲『获生徂徠全集1』五六六頁。ただし、徂徠は「百人扶持」とするが、後に述べるように、『本朝通鑑』完成後の寛文一〇年に幕府から門人教育料として与えられたのは、正確には「九五人扶持」である。

(33) 鷲峰は、塾生を試問する員長にたいしても、試問を与えている。たとえば、寛文八年に国史の試問一〇問を鳳岡・人

見友元・坂井伯元の三員長にたいして、「三子に試みるは、余が事なり。萌生諸生に試みるは、員長の任なり。豈に啻だに是れのみならんや。五科十等に在りても亦、准すべし」と述べて、五科十等の試問の模範例として与えている（『鷲峰文集』巻六三、論三員長、寛文八年仲秋、下七七〜七八頁）。

最初の三問は、「其の一、天孫降りて下国を治む。中州に降らずして、西隅に降る。其の理、何と謂ふか」「其の二、堯舜の聖、其の子、業を伝ふること能はず。禹湯武王の功德は、万世に及ぶこと能はず。唯だ本朝は百王一姓、其の徳化、歴聖に超越するか。豈に弁無からんや」「其の三、中華の書、或は本朝を曰ひて、泰伯の後と為す。然れども神武の馭萬は周の恵王に当るときは、則ち上、泰伯を距つること、三四百年為るべし。本朝の開闢は、神武より以前、天神地神七五の運、億万歳に過ぐ。何ぞ泰伯の来るを待たんや」である。

(34) 羅山は、寛永一七年（一六四〇）に鷲峰（二三歳）と読耕齋（一七歳）に「百問」を出題して、その解答を求めている。「恕・靖に示す百問」（『羅山文集』巻三四・三五）参照。

(35) 鷲峰・梅洞時代の林家一門では、詩会が盛んに開かれた。日野龍夫「江戸前期の江戸詩壇」（初出『日本文学』二五巻九号、一九七六年九月、『日野龍夫著作集』第一巻所収、ベリカン社、二〇〇五年）参照。日野は、林家一門に『莊子』への傾斜を指摘して、儒学の枠をはみだす意識に『莊子』的思考の助けを借りて表現への出口をつけたと論じている。日

野によれば、林家の学問は幕府の官学として社会的権威を持ち、その安定した立場のなかで教養と趣味として『莊子』を受容したという。しかし、この日野の解釈は、朱子学Ⅱ官学説をもとにしていて、当該期の林家の社会的地位を誇大に評価している。前掲拙著『近世日本の儒学と兵学』参照。

(36) 『人見竹洞詩文集』（汲古書院、一九九一年）四六〇頁。

(37) 梅洞が「詩科甲右等」に昇った時、「弘文先生」鷺峰に送った書には、「何ぞ寡陋の一科を超ゆるに堪へん。進みては外議の謗りを懼れ、退きては内省の疚しきに慚づ。然れども、塾式の定め、妄りに拒むに由無し」と述べて、昇級を受けられている（刈谷市立図書館村上文庫所蔵『梅洞文集』卷三）。梅洞については、本間洋一「天折の文人―林梅洞寛書―」（『北陸古典研究』二三号、二〇〇七年）参照。

(38) 徳田武編『鳳岡林先生全集』第一（勉誠出版、二〇一四年）一七九頁。

(39) 同右、一八二頁。

(40) ただし林家三代鳳岡の時、五科十等の制は廃止されたが、儒学普及の林家の戦略の一つの柱ともいうべき、孔子祭祀の積奠（積菜）については、湯島移転後も継続された。寛永一〇年二月一〇日の積菜を嚆矢として羅山から始まり、鷺峰の時に整備された。林家の積奠については、須藤敏夫『近世日本積奠の研究』（思文閣出版、二〇〇一年）参照。

(41) 高橋章則は、弘文学院学士の称号が、対朝鮮を念頭におい

ていたと指摘している。高橋章則「弘文学院学士号の成立と林鷺峰」（『東北大学文学部日本語学科論集』一号、一九九一年）参照。

(42) 素行の士道論については、拙稿「山鹿素行における士道論の展開」（『日本文化論叢』一八号、二〇一〇年三月）参照。

(43) 前掲日野「近世前期の江戸詩壇」参照。日野龍夫は、この時期の京都で門戸を張っていた松永尺五・那波活所・堀杏庵らの学塾との違いを指摘している。

(44) 石川謙前掲書、一七三頁。

(45) 徂徠は『学寮了簡書』のなかで「内記昌平坂二居住不仕、自身学寮ノ指南不仕、学頭マカセニ致、五科十等モスタレ」、「畢竟学寮ヲ離レ、書生ノ指南ヲ専ニ不仕、春齋家法ヲ失ヒ候処ヨリ起リ候事御座候」と指摘している。

(46) 徂徠の会読については、前掲拙著『江戸の読書会』参照。